

『文学少女の秘めやか逆痴漢』

声の出演：七凧るとろ

シナリオ：Arech(アーチ)

イラスト：小夏チハ

制作：オーガソフト

●ご注意

サンプルでは【0 文学少女の日記】【1 少女の誘い】以外は
各シナリオから一部ずつ抜粋しております。

また、このシナリオ PDF ではシナリオ補足、

製品版では絶頂シーンの補足と時間表記も入っています。

シナリオのみを楽しみたい方は通常のシナリオ PDF をお使い下さい。

・補足フォントカラー

・ 紫字：補足説明

・ 赤字：絶頂シーン（**ピーク時は太字**）

○自室で日記を綴る少女

誰にでも自分のお気に入りの居場所があると私は思う。

心が休まり、気を落ち着け、素の自分が出せる場所。

人によってはそれが自分の部屋かもしれない。

家族と過ごす時間かもしれない。

私にとってのそれは、幼い頃から通っている図書館だ。

大好きな文学作品が揃っていて利用者も少なく、司書は利用者に関心が無いのかカウンターの奥に引っ込んでいて滅多に見回りをしない。

だから、静かにゆっくりと本を読むことができる。

そこがかけがえのない私の居場所。

その図書館と本さえあれば、私はそれでよかった。

でもここ最近、本以外に惹かれるものができた。

図書館で会えるあの人に、私の心は惹かれている。

彼もまた私と同じく本が好きなのか、あの図書館でよく一人静かに読書をたしなんている。

私はいつからか彼のことを伺うようになっていた。

本を探しながら……本を読みながら……美しい文章を黙読しつつ、その瞳にそっと彼を写していた。

これを恋と呼ぶのか、愛と呼ぶのか。

今まで本にしか興味が無かった私には、この感情をはっきりと言葉にすることはできない。

ただ、分かっていることがある。

彼にも私のことを意識して欲しい。

私のことを見て欲しい。想って欲しい。

だから私は、彼とすれ違う時にそっと目を合わせていた。

さりげなく近くに座ったこともあった。

偶然を装い指先を触れあわせたこともある。

小さな積み重ねは植物に水を与えるようなもの。

つぼみがやがて花開くように、彼が私のことを意識し始めているのが分かる。

最近では彼と目が合う頻度が増えた。

たまに会釈をかわすことだってある。

カタツムリが這うように、ゆっくりと確実に彼との距離が縮まっているのを感じる。

このむず痒い距離感は嫌いじゃない。

だけど私は、小さな駆け引きをずっと楽しんでいられるほど大人でもない。

衝動が私の中で渦巻いている。

彼の心の奥にある秘めやかな部分を覗きたいという衝動が。

普通に接していたら決して見られない、性の懊悩。

彼の奥に潜むそれを私は知りたい。

彼も私も、結局は一人の人間。その奥には情欲の炎がきつと燃え盛っている。

明日の天気は雨。

時間が経つにつれ激しくなっていく豪雨らしい。

そんな日の図書館はいつも以上に人が少ないと私は知っている。

そんな日に彼は図書館に来てくれるだろうか。

もし来てくれていたなら……彼にずっとしてみたかったことをしてみよう。

私は大人ではないけど、子供でもない。

理性に隠された性の衝動は、私の中にもある。

ずっと彼に触れたいと思っていた。彼の本能を弄びたいと思っていた。

彼はいったいどんな姿を晒してくれるのだろう。

今からとても楽しみだ。

○筆記具を置き、そっと日記を閉じる少女

【1 少女の誘い】（16：03）

○雨の日の図書館。真っ直ぐにあなたの側まで歩いて来る少女

隣に座ってもいいかしら？

○頷く

失礼するわ。

○あなたのすぐ隣の椅子へ座る少女

……ねえ、私の勘違いなら申し訳ないのだけど、あなたとはこの図書館でよく会うわよね？
それに目もよく合うような気がするわ。

ふふ……いきなり話しかけて驚かせちゃった？

ただの独り言だから、気にしないで本の続きを読んでちょうだい。

私の声は外の雨音と同じ雑音と思ってもらって構わないから。

……私は蜜乃。

この図書館が好きでよく通ってるの。

ここは人が少なくて素敵よね。

おかげで読書が捗るわ。

私はね、文学作品を好んで読んでるの。

その中でも特に、執着的な恋愛描写を主体にしているのが好きだわ。

文学作品って不思議よね。

一見高尚に見えて、その実人の心の奥にある欲望を醜いくらいに暴いているわ。

この前読んだものはね、女の人が性に溺れる様子を怖いくらいに書いていたの。

恋人との心と体の繋がりが、徐々に本能に押しつぶされて歪になっていく。

そのうち普通の行為では満足できずにエスカレートしていった、人間の尊厳や恋人同士の思いやりなんてない、破滅的な性の倒錯に囚われるの。

その表現も直接的じゃなくて、時に回りくどくて、嫌になるほどねちっこかったわ。

○あなたに顔を寄せて囁く少女

私はね、人間のそういう部分に興味があるの。

普通の恋人同士では見られない、理解し合えない、心の奥底にある隠された部分。

私にも、そういう部分があるわ。

……あなたには、そういう部分があるのかしら？

ふふ……私、あなたに興味があるの。

あなたの隠された性の本能は、いったいどんな色をしているのかしら？

○本のページが進んでいないことに気付く少女

……あら？

本を読むのが止まっているようだけど、私の独り言はお邪魔だったかしら？

そう、今のはただの独り言よ。

……ああ、そうだ。

ちょうど誰かにおすすめしたい作品があったの。

図書館の奥にある文学作品のコーナー……そこまでついて来てくれる人はいないかしら？

……これは独り言じゃなくて、あなたに向けて言っているのよ。

さあ、ついてきて。

あなたも本当は興味があるんでしょう？

私の心の奥底にあるもの……秘めやかな部分が。くすくす。

○立ち上がり、文学作品コーナーへと向かう少女

……ふふっ、この文学作品に囲まれたコーナーは私のお気に入りの居場所なの。

元々人気の無い図書館だけど、ここは更に人が寄り付かないわ。

誰もいない、誰も寄り付かない。だから、こんなことだってできるの。

○スカート両端を持ち上げる少女。咄嗟に目をそらす

……あら、どうして目をそらすの？
スカートを少し持ち上げただけじゃない。
下着だって見えてないわ。
ただ、私のふとももが露わになっただけよ。

○動揺するあなたを見つめる少女

……どうしてこんなことをするのかって顔をしているわね。
うふふ……実はね、あなたにおすすめしたい作品は私のことなの。
私、あなたのことをずっと見ていたわ。
あなたと目が合うたびに、頭の中であなたにこんなことをしていたの。
下着を見せて……その下に隠れているオマンコまで見せつけたり……。
いいえ、もっと大胆なこと……。
あなたのオチンチンを触ったり、セックスをするところも想像していたわ。
そうよ。
いつも済ました顔をしながら、あなたにエッチなことをすることばかり考えていたの。
それがあなたの知らない私。
あなたに知っておいてほしい私。
だからもっと私を見て。
私という作品を受け取って。
こうしてスカートをたくしあげている今も、頭ではもっとすごいことを想像しているわ。
あなたもそうでしょう？
あなたは今、このスカートにギリギリ隠された私の下着を想像しているはずよ。
純白の綺麗な下着なのか……。
それともまさか、黒色で透けてしまっている大胆な下着なのか。
正解を教えてあげる。

○下着が見えないぎりぎりまでスカートを持ち上げる少女

ほら……全部は見せてあげないけど、ここまで見たら分かるでしょ？

そう、紐パンよ。

ふふ……意外だったかしら？

あなたがもしこの紐先を引っ張ったら、ほどけて下着がずり落ちてしまうかもしれないわ。

ふふ……今想像したでしょう？

紐がほどけて下着がずり落ちたところを。

そして、スカートの中で露わになった私のオマンコのことを……。

いいのよ。もっと私の露わな姿を想像して……。

私はずっと、あなたのそういうところが見たかったんだから。

私のエッチなところを想像してしまっただけで恥ずかしがっているあなたのこと……。

ずっと思い描いていたわ。

でも、想像通りっていうのもつまらないものよね。

もっと私の想像できないあなたの姿を見てみたいわ。

そうね……。

○あなたに身体を押し付ける少女

こんな風に体を密着させたら、あなたはどんな顔をするのかしら？

○顔を背ける

うふふ……恥ずかしそうに顔を背けたわね。

嫌なら拒否してもいいのよ？

でも、その様子だとあなたも満更ではないのかしら？

ほら、耳まで真っ赤になっちゃってるのに、ちらちら視線を胸に向けてくるじゃない。

照れた反応は可愛いけど、あなたの頭の中はスकेベな気持ちでいっぱいなんでしょ？

分かるわ……視線の動きや、ちょっとした体の動き……。

そんな些細なことであなただけのことなら全部分かってしまうの。

だって私は、ずっとあなたのことを観察してきたんだもの。

今あなたの頭は、こうして……。

○胸を更に押し付ける少女

押し付けられる胸の感触でいっぱいなんでしょ？

私の胸……自分で言うのも変だけど、大きくて柔らかいおっぱいでしょ？

ほら見て、あなたの体に押し付けているだけで、服の上から分かるほど潰れちゃってる。

こんなに柔らかいのにには秘密があるの。

実は今、ブラジャーを着けていないのよ。

だから押し付けただけでこんな風に……。

○胸を更に押し付ける少女

簡単に形が崩れてしまうの。

そう、この制服一枚隔てた先には、私の生おっぱいがあるの。

感じるかしら。あなたの体に押し付けている胸の先端……乳首。

さっきからずっとあなたに当たって、制服と擦れあって固くなってしまってるわ。

私の乳首の感触……今必死になって探しているでしょう？

うふふ……おっぱいばかりに意識がいつているから……。

ほら、いつの間にかこんなに顔が近くなっちゃったわ。

もう少しで唇が触れてしまいそうね。くすくす……。

ああ、ちなみにだけど、私はまだキスをしたことはないわ。

キスってどんな感触がするのかしらね。

……ねえ、もう少しで唇が触れあいそうだけど、いいのかしら？

あ……あ、……あ、んむっ……ん、んっ……んは……っ。

……うふふ、ファーストキス、しちゃったわ。

でも、せっかくの初めてなんだから、こんな唇が触れあうだけのキスじゃなくて、もっと忘れられないようなキスがしたいわね。

例えばこんな風に……。

あ、ん……ん……あむ、ん……………はあぁっ……。

あなたの唇を吸い上げたり……っ……。

もしくは、下唇にだけキスしてみたり……ん……。

唇を舐めまわしてみたり……あ……。

んふ……う……んはあ……んうう……………んあう……はあっ。

ね、こういうキスだったら、一生忘れられそうにないでしょう？

あら……？

……ふふ、驚いたわ。

私のお腹に当たってるこの硬い物……。

もしかして、あなたの勃起したオチンチンなのかしら……？

そう……今の口づけで興奮してしまったのね。

それとも、これから私に何をされるのか想像して大きくなってしまったのかしら？

んふっ、まあどちらでもいいわね。

重要なのは、私に主導権を握られて、あなたは興奮してしまっているということだもの。

【各シナリオ抜粋】（０５：１２）

【２ 上半身弄り】（００：００～）

こうしてあなたの乳首を弄りながら、もう片方の手であなたの指先をゆっくり撫でるの。
乳首を抓んだり、弾いたりしてる間もこうして指先を撫でつづけて……私に乳首を弄られて
いる感覚と指先を撫でる感覚をリンクさせていく。

そうすると、どうなると思う？

これから先、日常を過ごしながらふと指先を撫でる感覚を抱いた時、あなたは思い出すの。
乳首をこうして責められる時の感覚を……そして、乳首を責める私のことを。

【３ 下半身弄り】（０１：１４～）

ねえ、もしこの現場を誰かに見られてしまったらどうする？

気づいてないだろうけど、あなたの乳首は服の上から分かるくらいに勃ってしまっているの
よ？

その上、女の子にお尻を撫でまわされているなんて……こんなの、人に見られたら完全に言
い訳できないわ。

あなたがどう思われるか分かる？

女の子に痴漢されるみたいに体を触られて喜んでしまっている変態さん、よ。

【4 強制愛撫】（02：11～）

あなたの好きなようにオマンコを舐めなさい。

私が絶頂しても構わずに、あなたの気がすむまで舐めまわすの。

クリトリスを吸ったり……オマンコの穴に舌をねじ込んで中を舐めたり……全部、あなたの好きなようにしなさい。分かった？

さあ、始めなさい。

【5 ロスト・バージン】（02：53～）

私のオマンコの中、もっと感じ取って。

オチンポで私のオマンコのことをもっと理解して。

私の膣内の感触を知っているのは、この世界であなた一人だけよ。

あなただけが私の深い部分を知っている……そしてそれは私も同じ。

あなたのことを誰よりも理解できているのは、私だけなの……うふふふ。

【6 プレゼント】（03：46～）

んふふっ、可愛い反応だけど、今日はここまでよ。

これ以上長居すると、さすがにバレてしまうもの。

それよりも……あなたのパンツ、ザーメンまみれでべちょべちょでしょ？

これをそのまま履くのは気持ち悪いでしょうから、良い物をプレゼントしてあげる。

【EX あれから……】（04：17～）

○時が経ち、あの時と同じ雨の日の図書館

○いつものように文学作品のコーナーへと向かう少女について行く

ふふ……今日も来てくれたのね。

私がこうして文学作品のコーナーに向かうと、あなたもついてくる。

それが当たり前になってどれくらいが経ったかしら？

……なんて、つまらない疑問よね。

重要なのは、まだ私たちの関係がこうして続いているってこと。

それだけなもの。